
神様からの贈り物

雷稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様からの贈り物

【Nコード】

N0317V

【作者名】

雷稀

【あらすじ】

目が見えない主人公と、それを支える「きみ」の物語。
バッドエンドとハッピーエンドを分けて書いてあります。

7月24日に、表示の構成を変更。
オムニバス形式の小説としました。

残酷な贈り物はバッドエンドの物語、幸せの贈り物はハッピーエンドの物語（元・番外編）となっております。

二人の主人公の、二つの物語をお楽しみください。

神様からの贈り物

私は生まれたときから目が見えなかった。
だから空が何色なのかも、どんな形なのかも分からない。

一度でいいから、「色」というものを知りたかった。せめて死ぬまでに、一度だけ世界を見てみたい。
毎年、初詣と七夕の願い事は、決まって「死ぬまでに一度、目が見えるようにしてください」だった。
きっと一度でも色を知る事が出来たのなら、どんなに楽しいだろうと、想像は広がるばかりだ。

十

私は光を知らない。

明かりがあってもなくても、私にとっては同じなのだ。
例えば自分の一歩先が、常人は歩むのを躊躇うほどの、吸い込まれそうなほどに暗い闇に包まれていようとも、私は平気で歩いていける。

きみに出会うまで、私は心さえも闇に包まれていた。

両親に虐待を受け、愛情と言うものを知らずに育った。
家では母親のヒステリーを、父親の暴力を、そして妹の嘲笑を、その小さな体に全て受け止めていた。

十

きみと居る時は心が温かくて、光の無い私の世界に色が飛び込んで

くる様だった。

幼い頃は自分の不幸を泣いた事もあった。

何故私の目は見えないのかと。

私が泣くたびにきみがこう言った。

「きみの目は、この世の醜いものを映さない様に見えなくなっているんだよ。だから、きみの目はとても綺麗なんだ」

そして優しく頭をなでてくれた。

目の見えない私の手を引いて、色々なところに連れて行ってくれた。幼い頃は、近くの公園に。大人になったら、遠くの海に。

一緒に成長した私たちは、二人の思い出をたくさん作っていた。

いつだったか、私は死にかけた事がある。

階段を踏み外し、一時は心肺停止だったそうだ。

長い眠りから覚めた後の、気だるく朦朧とした意識の中で、きみの声が聞こえた。

学校であつた他愛ない出来事の話、私は耳を澄まして聞いていた。クラスメイトが言つたくだらないギャグの話で思わず笑つてしまい、きみがびっくりしていたのを覚えている。

でもその後で、泣きながら喜んでくれたのもきみだった。

私の世界は、きみが全てだった。

いつも私の世界にはきみが居て、きみが中心で私の世界が動いていた。

恋とか友情などという言葉では表せない、不思議な関係の私たち。私はきみが好きだった。

だから、きみも私の事が好きだと思っていた。

私は１８歳になった。
中学も高校もきみと一緒にだったから、何も怖くなかった。
大学もきみと一緒に。だから、やっぱり何も怖くない。

「屋上に行かない？」

卒業式が終わり、教室を出ようとすると、きみが呼びとめた。

「いいよ」

友人に挨拶を済ませ、きみと一緒に屋上を目指す。

いつもそうしてくれるように、今日も腕を支えてくれる。

目が見えない人にとって、何か掴めるものがあるのはとても心強いのだ。

きみはいつだってそれを解っていて、当たり前のようにそうしてくれた。

屋上に着くと、三月とは思えない暖かい風が頬を撫でていく。

「あったかいなあー。今年は桜が咲くの、早いかもよ」

添えている腕の振動で、きみが伸びをしたのが分かる。

「桜かあー。また土手のところの桜並木、連れてってね」

土手がどんなどころなのかも、桜がどんな花なのかも分からない。

ただ、桜並木と言うところの、春を感じさせる甘い香りは大好きだった。

突然腹部に激痛を感じ、体から生暖かいぬるぬるとしたものが出てくる。

それは生臭く、鉄のにおいがした。

普段は閉じている目をあけてみると、目の前にはきみの顔がある。

見た事はないけど、絶対にそうだと確信した。

突然飛び込んできた世界に、私は思わず目が眩んだ。

どこまでも広がる水。これが海なのだった。
その上にある、広い広い空間。これが空なのだった。
空にある、見ると目が痛くなるもの。これが太陽なのだった。
無数に浮かぶ、ふわふわとしたなにか。これが雲なのだった。

目の前には、私の腹に刺さるナイフを握り、微笑むきみがいた。
ああ、こんな顔をしていたんだ。

「ごめんね。もう、疲れたんだ。邪魔なんだよ。いつもいつも僕に付きまとってさ」

そう言つて笑つた君の顔は、おかしように、残酷に笑っていた。
その顔はきつと、「醜く」歪んでいたというのだろう。

いつかきみが言った。

この世の醜いものを映さない様に、私の目は見えないのだと。
今まで私は、醜いものが何なのか解らなかった。

だから、どうせなら映さないまま、知らないままに死にたかった。
綺麗な世界だと信じて死ねるなら、私はどれだけ幸せだっただろう。
神様の気まぐれなのか、悪魔のいたずらなのか。

私は今、目が見えるようになったのだ。

遠のいていく意識の中で、きみの高らかな笑い声を聞いた気がした。

十

もう少し早く目が見えるようになっていたら、私は死ななかったかもしれない。

でも、死ぬ直前だからこそ見えるようになったのだと私は思う。

きっとそれは、目の見えない私にくれた、神様からの残酷なプレゼントだったんだ。

神様からの贈り物（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

後書きは短編の方と同じ内容になっております。次回からは断りませんので、ご了承ください。

今回は、描写こそ残酷なものの、「ダーク」と言っほどのダークでも無い感じです。

温かいけど残酷な…灰色というところでしょうか？

名前を出さない「私」と「きみ」だけを使って書くのは大変でしたが、「私」目線で頑張りました。

いつもとは書き方を変え、一作目と同じ、ちょっとしたチャレンジです。

色々な作風が書けるように、地味に一步步頑張って行きます。

僕の物語（前書き）

「神様からの贈り物」を、「僕」視点でお送りします。

僕の物語

いつも傍に居たきみは、穢れを知らなかった。
綺麗なままで育ったきみは、僕の汚れた心なんて知らなかったんだ。

十

きみと出会ったのは小学校のときだった。

目が見えない事が原因で、いじめられていたのを覚えている。

僕はきみの事が好きだった。いじめられても耐え、強く生きていたきみが。

きみは僕にとって光そのものだった。

両親からの虐待を知った時は、どれだけ悲しんだことだろう。

幼かった僕に救えるはずも無かった。だから、出来るだけ一緒に遊ぶようにした。

遊ぶ相手の居なかったきみは、いつも嬉しそうに遊んだ。

きみは、どんどん明るい子になっていった。

十

いつだっただろう。

きみが階段を踏み外して、生死の境をさまよったとき。

あの時僕は、自分の心臓も止まるんじゃないかと思った。

毎日見舞いに行き、学校の話聞かせていた。意識が無いから聞いているはずは無いが、ぼくは話すだけで良かった。そうしなきゃいけない気がしていた。

やがて一週間が経ち、僕がクラスメイトのくだらない話をしていたとき。

突然きみが笑い出して、ひどく驚いた。でも、とてもとても嬉しくて、泣きながら喜んだ記憶がある。

きつと、きみの世界には僕しか居ないのだろう。

僕が出来ることなら、なんでもしてあげたい。

僕にとつてもたった一人の友達のきみは、僕にとつても大切な存在だったんだ。

十

高校に入学すると、僕には自然と友達が出来た。

元々暗い方ではなかった僕は、新しい友人たちにもすぐ馴染めた。でも、きみがいた。

きみはもういじめられっ子ではなく、明るく育った普通の女の子だった。

いつも僕に付いて来るきみ。友人も最初は「彼女だろー」などと言つてからかうだけだったが、次第に「付き合いが悪い」などと、僕を疎遠に扱うようになった。

いじめられこそしないものの、どこかよそよそしい。

僕はきみのせいだと思った。

十

きみを殺したい。

僕から全てを奪っていったきみを。

きみがいなければ全てうまくいっていたのに。邪魔するんだ、いつもきみは。

邪魔、邪魔邪魔邪魔。

ああもう、きみなんか生まれてこなければ良かったんだ。

何で僕はきみなんかに関わったんだろう。きみのせいで僕の人生は

めちやくちゃだ。

僕の黒い心を知らず、きみは真っ白な笑顔を見せる。
整った、美しい顔立ち。それはまるで、きみの心を映して居るよう
だ。

ならば僕は今、どんな顔をしているのだろう。

今日もきみは、僕の隣で楽しそうに笑っている。
明日もきみは、僕の隣で笑っているのだろう。

桜並木の香りを楽しみながら。
海の香りを楽しみながら。

十

僕たちは18歳になった。

大学もきみと一緒に。もう、離れられない悪夢のように僕に付きま
とう。

「屋上に行かない？」

卒業式が終わり、きみを屋上へ誘う。無垢な笑顔で、きみは僕につ
いてきた。

僕のポケットに入っている、きみの命を奪う道具がある事も知らず
に。

いつも通り、無意識に腕を支えた。当たり前のようにきみが手を添
える。

これで最期なんだ。この手できみを殺すんだ。

そう思うと、笑みが止まらなかった。僕は解放されるんだ。

いつも通り、明るく接する。桜の話を持ち出すと、君は嬉しそうに
答えた。

他愛ない話。いつも通り、けどもうこれで終わり。

音もなく、きみの腹にナイフが刺さった。どろどろと、真っ赤な血が流れる。

ゆっくりと目をあけたきみは、驚愕の表情を見せた。

僕が見えているのだろうか。醜くなった僕を。きつと今、笑っているだろう僕を。

きみは辺りを見回し、満足そうにまた僕を見た。穢れを知らない、純粋な瞳で。

ああ、目が見えているのか。

なんとなく、僕はそう思った。だから、言った。優しく微笑んで。

「ごめんね。もう、疲れたんだ。邪魔なんだよ。いつもいつも僕に付きまとってさ」

きみはひどく悲しそうな目をした。でも、全てを悟ったように、笑った。

死ぬ直前で、絶望を味わったんだ。

僕は高らかに笑った。

きみを殺せた事に。

己の醜さに。

今更気付いた、自分の気持ちに。

涙は止め処なく流れていった。

十

死体のきみは、この世界の何よりも美しい。そして、何よりも愛おしかった。

既に冷たくなってきたきみの頬を、そっと撫でる。

きみの血と僕の涙が混ざっていく。

もう、どれくらいこうしていたことが。

未来に希望はない。人を殺めたなら、更に酷い人生になるだろう。

きみの緩く握られた手のひらに、桜の花びらが乗っていた。

まだ咲いているはずのない桜。いったい、何処から来たのだろう。

帰り道、土手の桜並木に、一本だけ満開に桜が咲いている。

早咲きの桜は、まるできみへの鎮魂歌を歌うように、さわさわと揺れていた。

僕の話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

急ピッチで仕上げたもので、見苦しい点多々あるかと思っています。

時間があるときにまた編集して行きますので、大体の「僕」の心情が分かっていただければ嬉しいです。

さて、「僕」は結局、「きみ」の事が好きだったのかもしれませんが殺してしまってから気付いたその気持ちを、どう受け止めていくかは「僕」次第ですよ。

罪を背負って生きていくのでしょうか。自分も、自殺という道を選んではしまうのでしょうか。

そこは、読者の皆様の想像にお任せいたします。

自分なりのストーリーを描いていただければ幸いです。

番外編と言う形で、幸せな結末を書いたりしてみても面白いかな…
と思ったりしてます。

さて、二作両方のこだわりとして、一人称は漢字、「きみ」は平仮名なんですよ。

平仮名にする事によって、色々な意味をもたせたくてこうしました。
変なこだわりですよ（笑）

それでは、長々と失礼しました。

天国からの目隠し（前書き）

さてさて。ずるずると「神様からの贈り物」シリーズ五作目。
今回はバッドエンドの方の番外編…というより、その後の物語とな
っております。

それでは、どうぞ。

天国からの目隠し

きみを殺して半年が経った。

残ったのはやり場の無い気持ちと、きみの影だった。

十

きみを殺したその日、僕は逃げた。

刺さるナイフを手に握らせただけの工作。

それだけで、障害を抱えて居たきみは自殺と判断されてしまった。

いつ真実が発覚するか分からない不安と恐怖に押しつぶされながら、大学の入学式を迎える。

きつときみほどじゃなくても、僕の心はぼろぼろだった。

入学して暫くすると、桜並木のところに見慣れた背中が佇んでいた。まるでそこだけ現実世界から切り離れたように、その存在は儚い。触ると消えてしまいそうなそれは、白いワンピースを纏っている。

きみだろうか。

間違えるわけが無い。十数年寄り添ってきたのだ。この背中には確かにきみだった。

近づいて、恐る恐る触ろうとする。

足音に気付いたのか、警戒心の強い小動物のようにきみが跳ね上がり、閉じた目をゆっくりと開けた。

また、目、見えるようになっていないかなあ。

きみはぱくぱくと口を動かし、やがて微笑んで桜吹雪と共に散って

いく。

早咲きだった桜は、もうすっかり深緑に染まっていた。

十

春の出来事を忘れられないで居ながら、半年が過ぎた。

秋も本番に差し掛かり、銀杏の木が一際人気を集めている。

帰り道、大学の友人と別れてから、何気なく桜並木を通ってみた。

暫く通らなかつたそこは、主役を取られていじけているような桜達
が、緑の体を揺らしている。

自転車を止め、土手の斜面に寝転がる。針のような芝生が、今は心地よかつた。

下流の川を眺めていると、不意に目の前が真つ暗になった。

貧血などではなく、まるで誰かに視界を塞がれているような違和感。
しかし顔には人肌の感触など無く、ほんのり温かい空気が僕を纏っ
ているだけだった。

これはきみの体温だろうか。

そんな考えに至るほど、この温かさはどこかきみに似ていた。

塞がれて居るのなら同じだと、目を瞑る。きみの温かさを楽しむ為
に。

しばらくして目を開けると、そこには都会の星空と、謙虚に雲を纏
った月が出ているだけだった。

十

それからだった。

家や学校で、時々ま僕のところに見れては、目を隠す。

家ならまだ良かったが、講義の途中で視界を奪われると辛い事があ

った。

板書が出来ず、見えるようになってから慌ててノートを取る。そんな日々が続いて、最初はどこか落ち着いたきみの存在も、今は鬱陶しいだけのものになっていた。

ある休日の事。

大学の友人と面白くない事があり、少しイラついていた週末のことだ。

ベッドでごろごろとだらけていた僕に、きみが寄り添った。

きつとピリピリした僕をなだめようと、傍に来てくれたのだと思う。その日は目を隠さず、ただ寄り添っているだけだった。横に、温かい空を感じる。

普段ならば聞こえているのか分からないお礼を言って、そっとしておいた事だろう。

しかしその日はかりは気に食わず、今までの事を全てぶつけてしまった。

「何なんだよ。殺したのに。殺したのに死んでもまだ付きまとうのか！解放されたんじゃないのかよ！ やつときみから離れられると思ったのに、これじゃ……何も変わらないじゃないか！」

叫んで、気付く。

霊を信じても居なかった僕が見えない存在に対して叫んだ事に。

また、それがきみだと思い込み、その事実をすんなりと受け止めていた自分に。

「きみだよな、そうだよな。だって、目を隠すなんてきみしかないない」

荒くなる息を整え、虚空に向かって訴えた。

きみであってくれ。そしてもう、いなくなってくれ。

私はまた、空を見たい。

今度ははつきりと、しかしどこか儚い声で、きみの声が耳に届いた。
見えるようになっていないかな。

その声がどこか狂気じみていたのは、その時の勘違いなどではなかった。

十

悪い、悪い、悪かった。僕が悪かった。謝って許されなくても、許すまで謝るから。お願い、許して。

今日も僕は、虚空に向かって許しを請う。

あの日から毎日毎日、僕の目を塞ぎにやってきた。

ひどい時は半日、目が見えないこともある。

日に日に奪われていく視界ときみの存在に、恐怖を覚えていた。

見えない怖さ。真っ暗な視界。きみの体温。

全てが僕の中でどす黒い恐怖となり、じわじわと僕を侵食していった。

ねえ。きみの目、ちょうだい。

欲しいな。きみの目。

私のと交換しようよ。

私を殺したんだからその位してくれてもいいよね。

耳元で囁かれる言葉もまた、日に日に狂気を増していく。

これがあの優しかったきみのだろうか。僕の隣で微笑んでいたきみののだろうか。

何できみはそんなに変わってしまったんだろう。もしかして、きみに化けた悪魔？

いや、変えたのは僕だ。悪魔にしたのは僕だ。
僕がきみの全てを……人生だけでなく、きみの優しささえ奪ってしまっただ。

僕の目できみはまた微笑んでくれる？

十

麗らかな春の日。あの日から丁度一年、きみの一周忌だ。

きみが僕に殺された屋上は立ち入り禁止で、花を添える事は出来ない。

代わりと言っては難だが、土手で揺れる八分咲きの桜のところに、小さな花束を添えた。

四六時中僕を追いかけるきみの影は、今日だけ見当たらない。

寂しいような、安堵したような気持ちを抱えながら家に帰り、ベッドでまどろんだ。

ねえ？

僕を呼ぶ声が、夢現の中で聞こえる。

ゆっくりと目を開けると、そこには白いワンピースを纏ったきみが立っていた。

下を向いている顔がゆっくりと上がり、微笑んだ。

その顔を見た瞬間、声にならない声を上げながら、来るなど必死に抵抗した。

きみの腹から流れるものは床に血溜りを作り、手にはあのとときの血だらけになったナイフが握られている。

美しいきみの顔は、目から口から流れる血で汚れていた。

赤色に染まったワンピース、ナイフを握る美しい手。

純白のワンピースを汚していく赤黒い染みは、穢れの無かったきみ

が赤黒いものに穢されていく姿が良く見て取れ、純潔とはかけ離れた、別の美しさを醸し出していた。

優しい微笑みが、今は妖艶に見える。

媚びる様な、虚空を見つめたその瞳が、僕を捉えた。

恐怖でしかなかったその姿に今は見惚れ、しかも股間に血が滾りつつある。

「あ……その、何の用」

今更何の用、はないだろう。恐怖と興奮で頭がおかしくなっているのかもしれない。

目、もらいにきたよ。

血を撒き散らしながら近づいてくる艶美なきみに、逆らえるはずも無い。

四肢を動かしたくても、全く動かない。ただきみを見つめ、死を覚悟するだけだ。

次の瞬間には眼球を抉り出される痛みと共に、視界の全てが奪われた。

苦痛に悶え苦しむ僕の姿を見て、きみが笑っているのが聞こえる。

はい。私の見えない目、あげるよ。

痛み以外何も感覚が無い眼底にコロンと何かが入る感触があった気がする。

耐え切れなくなった痛みに、僕は意識を手放した。

十

その後、原因不明の失明を僕は煩った。

精密検査をいくら受けても、原因は不明。僕の望みで虹彩の検査を
してもらったが、確かに僕の眼球だった。

原因は僕しか知らない。いや、僕と、天国に居るきみだけ。
視界の無い不安に精神までやられ、今は自宅で療養している。

久々に桜並木を通りたくなり、母親に頼んで連れていってもらった。
初夏、季節はずれの桜の下で、真っ白なワンピースを纏い、僕を真
っ直ぐ見つめるきみの姿を見た。

見えないはずの僕の目が、一瞬だけ光を灯す。

残酷な微笑みを浮かべ、手を振るきみの姿。

それがきみを見た最後の時であり、人生で見た最後の光景だった。

天国からの目隠し（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

今回初のホラー要素あり。苦手な方がいらっしやったら申し訳ありません。

何と言うか… やっていいのか不安な作品でした。

綺麗な（？）作品だった「神様からの贈り物」に残酷描写を取り入れると、作品が崩れてしまうのでは無いか。

でもどうしても書きたくて、書いてしまいました。

一応バッドエンドの完結と言う形でしょうか。

いやあ、三作で完結！万歳、などというのに、あれから二作もアップしてしまった…

折角完結の祝福の言葉を頂いたのに、すみません。

もう少しこの子たちにお付き合い願えないでしょうか。

ちょっとチャレンジ作品でもありますので、読者様の感想、是非是非お願いします。

辛口コメントもありがたく拝聴しますので、そちらもよろしく願います。

しあわせのいろ（前書き）

番外編、叶わなかった幸せな結末を「私」目線でお送りします。

しあわせのいろ

私が光というものを知らないまま、18年が過ぎた。
ずっとずっと傍にいたきみは、今日も傍に居る。

恋人になるのは、今更というような気がした。だから、このままでいいんだ。

三年前に自分の気持ちに気付いた事を、きみは知らない。

十

きみに殺される夢を見た気がした。

寝起き特有のぼんやりとした意識の中、ぼんやりと記憶が蘇る。

高校の卒業式の後の、学校の屋上。腹に刺さるナイフ。

時間が経つごとに、ゆらゆらと曖昧になっていく記憶。やがて、き
つちりと目が覚める頃には、その事を忘れていた。

今日は大学の入学式だ。

十

着なれないスーツを纏い、きみと共に歩く。近くのキャンパスだが、
自転車で行くわけにもいかないので、今日は歩きた。

「綺麗だよ」

その一言が嬉しかった。添えてくれる手は、今日も優しい。
ずっとこのときが続けばいいのに。

我ながら少女の様な考えだが、そう思えた。

ふわりと漂ってきた花の香りに、思わず頬が緩む。

「桜の香り。もう、咲いてる？」

「まだかな。蕾になって、ところどころ咲いてるくらいだよ。今年

は早いと思つたのに」

きつと今、きみは肩をすくめたんだろう。

「あはは。きみの勘は毎年大はずれだね」

他愛ない話は、キャンパスまで続いた。

十

大学に入学して、もう三年が経つ。

友人からからかわれるのも気にせず、きみはいつも私と居てくれた。高校時代、それで苦しんでいたのを知っている。私のせいで友人ができない事にちゃんと気付いていた事を、きみは知っているだろうか。

大学の友人は温かかった。からかうとはいえど、邪険に扱う事は無かった。勿論、サークルの友人もだ。

必要なときは助けてくれたから、きみの負担も軽くなっただろうか。きみが友人と楽しそうに会話しているのを聞くと、私はとても嬉しくなった。

十

「もうすぐ卒業、かあ」

就職活動で忙しい中、久々の休日。私はきみと二人で、少し遠い海に来ていた。

海水浴シーズンが終わって、人は居ない。時折地元の人が散歩に来る程度だ。私ときみは、日陰の砂浜に腰を下ろしている。

休日くらいゆっくり休みたいだろうに、海へ行きたいと言ったら、自転車で連れてきてくれた。

覚えている。ひんやりとした砂の感触、貝のかたち。海のおい。自転車で来るところは高校時代と変わっていない。そういえば、あの時はおしりが痛くなって文句を言ってたっけ。

「なーにニヤニヤしてんだよ。卒業がそんなに嬉しいか」

思い出に浸っていると、頭を小突かれた。私、そんなに笑ってたの
だろうか。

「ごめん、ごめん。話、聞いて無かったよ。前に連れてきてくれた
事思い出して……」

そう言うときみも、ああ、あの時か、と言って笑った。正確には、
笑った様な気がした。

「僕、きみの事を疎ましく思ったときがあつたよ」

唐突にきみが話し始める。高校時代で思い出したのだろう。いきな
りでびつくりしたが、何故か私は落ち着いていた。

「知ってる」

目が見えない分、そういう所にはとても敏感だった。特に、きみの
事は。

「うん。きみが気付いてたの、知ってるよ。でも、話さなきゃいけ
ない気がして」

きみも気付いてたんだ。私が気付いていた事に。それを知った瞬間、
嬉しいような、悲しいような感情が心の奥に根を下ろした。

「ごめんね。私は、きみ無しじゃどうしようもなかった。気づいて
いても、どうすることもできなかった」

謝っていいのだろうか。きみの好意を踏みにじることにはならない
だろうか。でも、謝らなきゃいけない気がした。きっと、とても思
いつめていただろうきみに。

「それも、知ってた。きみが邪魔になって、殺したくなったときも
あったよ。でも」

きみが一旦、呼吸を整える。私は、ひどく泣きそうになっていた。
殺意まで抱かせてしまった罪悪感に。私は、何も言えなくなっ
てしまった。

「でも、やっぱり僕にもきみは必要だったんだ。きみが僕を必要と

してくれたのと同じに」

胸が苦しい。きっと、それはとても嬉しい言葉だ。でも、いいのだろうか。苦しめたのは私なのに。それでも必要としてくれるなんて「きみが悩む必要はないよ。気にしなくて良いんだよ、もう過ぎた事なんだから」

まるで私の心を見透かしたように、言った。そして、頭を撫でてくれる。

「私も」

やっと、言葉を搾り出す。言えるだろうか、臆病な私に。

「あなたが必要なの」

普段は閉じている目を開き、見えないあなたを見るように、言った。無言で抱きしめてくれたきみは、そっと私の唇にキスをした。

なんだよ、目、また閉じなきゃいけなくなったじゃないか。

幸せな文句は、心の中にとどめておく事にして、黙ってきみの背中に手を回した。

十

あれ以来、正式に付き合うことになった私たちは、卒業後に結婚する事になった。

きみの両親も大喜びで、友人たちも祝福してくれ、何一つ不幸せな事はない。

ただ、結婚するなら、私の家に挨拶に行く必要がある。

帰れるだろうか、あの家に。虐待は中学で終わったものの、陰湿なムードなのは変わらない。耐え切れなくなった私は、高校を卒業すると共に家を飛び出してしまったのだ。

その後の事は知らない。家族とは一切連絡もとらずに過ごしてきた。行きたくない。けど、行かなければ後悔する気がした。根拠はない。冴えた第六感がそう告げていた。

十

「ただいま」

懐かしい家のおい。どんな仕打ちを受けても、家は家だ。

「おかえりなさい」

奥から聞こえたのは、母の声だった。何故だろう、とても歳をとった気がする。

おかえり、など初めて言われた。緊張が全身を駆け巡る。

「突っ立ってないで、入ってらっしゃい。緊張しなくていいのよ」
何故だろう、あんなに酷く扱われていたのに、こんなに優しいなんて。今更、いとおしく感じてしまう。

覚束ない足取りでリビングへ向かった。黙ってソファに腰掛ける。

お父さんの、においがしない。

「あの……お父さんは」

しどろもどろに聞くと、母はため息混じりに言った。

「亡くなったわ。あなたが家を出てすぐに、お酒の呑みすぎでね」
知らなかった。父が亡くなっていたなんて。

無性に悲しかった。死んだ事に対してなのか、最期まで父の愛を受け取れなかったからなのか。

「ごめんなさい。謝っても許してはくれないかもしれないわね。幼いあなたを傷つけたのだから」

過去の事を謝っているのだろう。しかし、今の私に怒りという感情は無かった。

「いいのよ。もう、済んだ事だから」

許してはいけない事実だと言うことも分かっている。だが、過去は気にせず、私は未来に向かいたかった。

「顔を良く見せて」

母が立ったのが、空気の流れで分かった。私の横に座ったことも。無言で、母の方に顔を向ける。

「大きくなっただね…本当に」

目を開けた。見えるはずはないが、母に目を見せてあげたかった。

「お母さん。あの……」

言わなければ。結婚の事を。勇気を出して、言った。

「私、結婚したい。幼馴染の、あの人と」

母の反応を伺う。数秒が、とてつもなく長く感じた。

「良いじゃない。あの子なら、大賛成よ。今度、うちに呼んでらっしゃい」

ああ、良かった。

初めて、私は母の前で泣いた。母は黙って、肩に手を添えてくれた。

十

きつく締め上げられた体に、思わず悲鳴をあげた。

「はいはい、動かないでください」

着付けの担当の人が、くすくすと笑う。

コルセットがこんなにきついものだったなんて。世の中のお嫁さんは、皆こんなものを着ていたのか。

「眉間にしわを寄せてちゃ、折角のお顔が台無しですよ」

もう一人の担当の人も、笑っていた。

やっとの事でドレスを着終わる。

純白のドレスは私の体を纏い、ふわふわと踊っていた。
勿論、「純白」がどんな色か私には分からない。

でもきっと、今の私の心のような、幸せな色をしているのではない
か。

名前を呼ばれ、私は声の主の元へ向かう。

「綺麗だよ」

あの時と同じように、あなたは言った。私もあの時と同じように、
笑った。

私はこれから、あなたと人生を共にするんだ。
たくさん思い出を作るんだ。

開けた窓から入ってきた、桜と海のおい。

私の心はもう、たくさんの色で満ち溢れていた。

しあわせのいろ（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

今回は番外編、今までの1・5倍近く文字数を使ってしまった。バッドエンドの方は、夢という形で登場させています。なんか、そうしたかったので。

途中、「きみ」を「あなた」と呼んでいるところがありますよね。一応、作者なりの想いがあるのですが、読者様一人一人が考えていただけたら嬉しいです。

ハッピーエンドは初めて書きましたが、いかがだったでしょうか。あまり得意じゃないのかもしれませんが、でも、書いていて楽しかったです。

それでは、長らくのお付き合い、ありがとうございます。
一応短編と言う事でアップしますが、改めてシリーズものとしてもまとめようと思います。

感想・アドバイスをいただけたら嬉しいです。

しあわせのかたち（前書き）

この度、「神様からの贈り物」シリーズがユニーク100を突破しました。

嬉しくて嬉しくて嬉しくて嬉しくて、またまた記念作品をつくってしまいました。

「あなた」と送る、小さな番外編です。

正確には、番外編の番外編かも。

それではどうぞ。

しあわせのかたち

気付いていた。

私に起こっている体の異変が、風邪などでは無い事。

一週間前から、だんだん酷くなっていく症状。

震える手が止まらない。

なんて言おう。会社から帰って、疲れているあなたに。

料理の手を止め、余熱で音を立てる肉の音が止むのを待った。

ソファに腰掛け、天井の方向を向く。きっとこれを、「天井を仰ぐ」と言うのだろう。

テレビなどうるさいだけだ。ソファに座って、お気に入りの音楽を聞いたり、考え事に耽るのが大好きだった。

しかし、今はひとつの事しか考えられない。

なんて言おう、なんて言おう。

あなたの事だから心配するだろうか。

ふたりの将来の事。もっと先の将来の事。

そうこうしているうちに、あなたが帰ってきた。

いつもは出迎えるが、今日はおとなしくソファに座っている。

料理の音が聞こえないからか、出迎えが無いからか。

異変に気付き、すぐさまリビングに駆けつけた。

「一体、どうしたんだ？今日は疲れてるのか」

なんて言おうか。考える前に、口が動く。

「肉のにおいがむかついて。ちょっと、気持ち悪くなっちゃったの」
「それって……？」

おそろおそろ私の顔を伺う様子が、見えなくても分かった。

「これからは私だけじゃなくて、この子も養わなきゃね」
まだ平らなお腹を撫で、微笑んだ。

神様から授かった、大切な、大切な贈り物。

目の見えない私に、たくさんの色と幸せをくれた神様。

それでもまだ、幸せな贈り物を私にくれるんだね。

神様ってやつは、私とあなたを幸せにするのが好きみたいだ。

この子もきつと幸せになりますように。

三人で、温かい家庭が築けますように。

きみが生まれるのを楽しみにしているよ。

しあわせのかたち（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

さあ、企んでいたプチ番外編、突破記念に書きちゃいました。ええ、書きちゃいましたよ。

いつになったらこの子たちの物語は終わるのでしょうか。
きっと、読者様の数だけ、物語があるのでしょーね。

私も思いの他、この子達が気に入っているようです。
小さな物語など書いてしまったら、もっと書きたくて書きたくて
筆ならぬキーボードが止まらないです。

潔く止めるのも手ですが、どうせならちょっと書いてみたくなって
しまった雷稀でした。

感想・アドバイス等ありましたら、よろしくおねがいします。

しあわせの果てに（前書き）

こんにちは。

ちよつと間が空いて、いよいよハッピーエンド完結編です。

それでは、どうぞ。

しあわせの果てに

人には寿命と言うものが存在する。

それは運命なのか、偶然なのか。

運命ならば、何と神の残酷で、優しいことだろう。

十

今日もお気に入りの場所に座る。

家にある小さなテラスの二人がけのベンチに腰掛け、海のおいを感ずる。

時期によつては桜や金木犀のおいも運ばれてきて、季節を楽しむ事が出来た。

今は桜のおいがたくさん風に乗って私のところに届き、幸せを運んでくれる。

ここからは、少し遠くの方に海を、眼下には川と桜並木が見えるのだと、きみが教えてくれた。

今日は土曜なので母と妹が来ており、久々に骨を休める事が出来る。二人はたまに来ては、家事などをこなしてくれた。家事をする事は苦痛では無いが、二人の好意には甘える事になっている。

今も開けたテラスの入り口の奥から、歯切れのいい包丁の音と、子供と遊ぶ妹の声が聞こえた。

子供はもう五つになり、来年からは小学校だ。妹は大学を卒業し、仕事に精を出している。

しばらく家事の音と潮風を楽しんでいると、隣に誰かが腰掛けた。ふわりと空気が動き、そっと私の髪をなでる。大きな手は、私の頭をすっぽり包んでしまいそうだ。

「今、空はどんな感じ？」

私は時々、空というものの色や状態を聞く事があった。聞いても分かる事は無いが、分からないものを空想するのは楽しいものなのだ。「夕方だからね。海に太陽が沈みかけて、空と雲面オレンジ色に染まっている。太陽と反対の空からはだんだん夜が近づいてきて、紺色の空になってきてるよ」

尋ねる度に丁寧に、あなたは空の事を教えてくれた。

真っ青な晴天の時。どんよりと灰色に染まる、曇天の時。星がきらめく、星空。

私の中で、私の知らない世界は、どんどん広がっていった。

「さあ、もう冷えるから中に入ろう。そろそろ夕飯も出来そうだ」

幼い頃から変わらない優しい手つきで私を支え、さり気なく腕を貸してくれる。

私はそれに従い、ゆっくりと部屋へ入っていった。

十

最近、体の調子がおかしかった。

といっても、別にどこが悪いところがあるわけではない。何となくそう感じるのだ。

逆らえない、私の視界よりも濃い闇が体をのっとっていく様な、何か。

体にすら出ていない異変をどうして感じる事が出来るのか。きっと、私の研ぎ澄まされた第六感がそう告げているのだろう。

そして私の体を全てののっとるまで、もう時間が少ない事も知っていた。

私が猫だとしたら、主人の前から姿を消す時期なのだという事も。

十

良く晴れているらしい、桜が満開になる時期。

私は、闇が体を完全にのつとるのが今日だと言う事を知っていた。時刻までは分からないが、きっと夕方だろう。

思い残すことはたくさんあった。家庭の事。これからの事。胸にいつぱい刻み込まれた思い出も、出来ることならもっと増やしたかった。

だが、これが神様の決めた運命ならば、私はあえて従おう。数え切れない、かけがえの無い奇跡を私にくれた神様が私を呼ぶのなら。

そしてその時が来るまで、今日はずっとテラスに座っているつもりだった。

今日は日曜日。私の大好きな家族たちは、みんな家にいる。最後まで神様は慈悲深かった。

朝早く起きて、やりたい事をこなす。いつも通りだけど、ひとつひとつが、これで最後なのだと思うと、悲しいような、勿体無いような複雑な感情があった。

家族達が起きると、きみを呼び、ひざの上に載せる。あなたは私の隣に腰掛け、一緒に海を見ていた。

きみに、もうすっかり覚えてしまったたくさんの童話を聞かせ、一緒に笑った。

あなたは私の異変に気付いているようだった。悟りを開いたような顔でもしていたのだろうか。

空が表情を変えるごとに、私にそれを教えてくれる。

黙って私の手を握り、時折震えながら強く握ったと思えば、また優しく包みこんだ。

きみが童話に飽きると、今度はあなたとの、幼い頃からの思い出話を話した。

あなたも時折会話に入り、笑い、そしてちよっぴり照れたように。きみはそれを、きつと真剣な顔で、熱心に聞いていた。

とてもとても幸せな、最期の日だった。

十

夕方になると、逆らえないような眠気が私を襲う。あなたに母と妹を呼ぶように頼むと、私の家族たちみんなで海を眺める。

眠気で私の思考が途絶えそうなとき、唐突に私の目に光が灯った。一点の光。それは段々と大きくなり、次第に周りの情景も映し出された。

最後の最後まで、神様は優しくかった。光の無い私に、最期の光を灯してくれた。なんて幸せな、素晴らしい贈り物なんだろう。

やがてはつきりと周りが見えるようになって、そこには素敵な光景が広がっている。

世界は二つに分かれていた。上の方はきつと空で、下は大地と海なのだろう。

この世界の境目を、水平線や地平線と呼ぶのだろうか。そこに、半分だけ眩しいものが沈んでいる。

「あなた。あのきらきらした何かが、海と言うの？そこに沈んでいるのは太陽かな。この空が、話してくれていたオレンジ色と言う色なの？それとも、私の髪と同じ色をしている、もう片方の空がオレンジ色かしら。何か色々な形が浮いているけど、これが雲なのね」まるで無邪気な子供のように、私は辺りを何度も何度も見渡す。

「ああ、あのきらきらしたものは海と言って、青と言う色だよ。沈んでいるのは太陽。太陽の方にある色がオレンジで、きみの髪と同じ空は、黒と言うんだ。ほら、黒い空に、うつすらと点があるだろう。それを星と言うんだ。色々な形のものは、雲だよ」

私の質問を、丁寧に丁寧に教えてくれた。もっとたくさん、桜の色、川の色、道路の色、本当に沢山の色を私に説明してくれる。

いっぱいの色とともに、温かい、目に見えない色も心に増えていった。

突然見えた私の目に、あなたは驚かなかった。何故か、ごく自然に対応してくれる。

優しい顔の、想像どおりのあなた。自分でも分からないが、何故か初めて見た気がしない。

私の腕ですうすうと寝ている、きみの顔。私の肩に手を置く、母と妹。二人までもが、事実をすんなりと受け入れてくれていた。

奇跡を目の当たりにした人より、当の本人の方が焦っているようだった。

襲う眠気に抗いつつ、必死で目の前の景色を目に焼き付ける。

家族の顔も、しっかりと、何度も何度も焼きつけた。

きみの頭を優しく撫で、ずっとそばに居られなくてごめんね、と呟く。

あなたの手を取り、最期の愛の言葉と、伝えきれ無い程の感謝を述べた。

母の顔を見つめ、感謝と、励ましの言葉をかける。

妹の肩を叩き、これから頑張れよ、と伝える。

最後に海を眺め、潮の香りと、ほのかな桜のにおいを楽しみながら、ゆっくりと目を閉じた。

一筋の涙が頬を伝い、風が冷たく感じる。

きっと後で、私が一人一人に宛てた手紙を読むことだろう。きっと、幼い子供のように曲がった、私の字。伝えきれない言葉を、必死に何枚もの紙に綴った。

「幸せでした」

私にくれたたくさんの幸せを、今度はあなたたちにあげたい。温かい、暖かい、幸せを。

どうか泣かないで欲しい。私はずっと、見えなくても、あなたたちを守るから。

私が愛した人たちと、夕と夜の入り混じった美しい景色に包まれながら、私は暗く、優しい、安らかな永い眠りについていった。

しあわせの果てに（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

最後と言う事で、ちょっと長めの後書きに。

いやあ、終わった、終わった！

嬉しくもあり、ほっとしていて、それでもちょっと寂しいです。

長編の連載は無理だと思っていたので、オムニバス形式にして良かったと思います（笑）

これなら間を書かなくても、書きたい場面だけ書けたので、精神的に楽でした。

六作品とも、長い文章ながらすらすると書いて、執筆中はとても楽しく出来ました。きっと、読者様より雷稀が一番楽しんでますね（笑）

さてさて、それではちょっとかしこまって。

今まで応援してくださった方々、読んでくださった方々、感想を書いてくださった方々。

たくさんの人に支えられて、無事に完結する事が出来ました。

この場をお借りして、お礼申し上げます。

ありがとうございました。

……ということで、この話は終わりましたが、番外編などは書くつもりです。

日常などを切り取った番外編など。「その後」は、読者様の中

で想像して欲しいので書かないと思います。

では、本当にありがとうございました。

感想・アドバイス等ありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0317v/>

神様からの贈り物

2011年10月9日00時39分発行